

原子力基礎基盤戦略研究イニシアティブ
「原子カムラ」の境界を越えるためのコミュニケーション・フィールドの試行
第2回外部評価委員会
議事録

日時：平成25年3月11日（月）15：30～17：30

場所：東京大学工学部12号館2階会議室

出席者：9名（順不同・敬称略）

<業務実施者>

木村（東大）、土田（関西大）、神崎（PONPO）、吉山（東大）、丸山（NV研）

<外部評価委員>

安部（関西大）、定松（東大）、新澤（デロイトトーマツリスクサービス）、
松田（元原子力委員）

配布資料

2-0. 議事次第

2-1. パワーポイント資料

2-2. 社会調査分析結果

2-3. 第6回エネルギーと原子力に関するアンケート（首都圏）

2-4. 第7回エネルギーと原子力に関するアンケート（学会員）

2-5. フォーラムへのご協力のお願ひ

議事

1. 今年度業務の報告
2. 次年度の計画について
3. その他

1. 今年度業務の報告（配布資料 2-1、2-2、2-3、2-4、2-5）

木村氏より、資料 2-1 に基づき、今年度業務の概要と、各業務の達成率の報告がなされた。今年度実施予定の業務は、ほぼ達成されている。「フォーラム参加者の決定」（後述）と「情報の共有および成果のとりまとめ」（第 4 回業務推進全体会合を開催予定。学会発表をする予定）が残っているが、3 月中に完了予定である。

次に、具体的な成果の報告がなされた。まず、土田氏より、資料 2-2～2-4 に基づき、社会調査の分析結果が報告された。社会調査の結果について、外部評価委員よりご意見をいただいた。

- ・ 原子力学会員が「自信を回復している」と思われる結果（昨年度事故を受けて肯定側の意見が減少したが、今年度は元に戻りつつある）が多数みられる。なぜ自信を回復したと思うか。

→2012 年末の総選挙の結果が影響しているのではないか。

→福島放射線の測定結果も、安定もしくは徐々に低下傾向にあり、学会員はそのデータを見て安心しているのではないか。→放射線の量の捉え方も、首都圏住民と原子力学会員では差があるだろう。

→原子力関係者は、事故後、社会とのコミュニケーションを控えた者が多いのではないか。そういった中での自信の回復であれば、「危険な」回復である可能性もある。

- ・ Q11「ウ）今後、原子力発電の安全を確保することは可能」に対する考えが、首都圏住民と原子力学会員の間で大きな隔たりがある。原子カムラを越えるためには、このギャップを埋めることが特に重要だと考える。原子力学会等も、もっと情報発信をしてもいいのではないか。

- ・ 工学技術は、失敗を重ね安全性を高めていくという側面もある。しかし、原子力発電は、失敗を経て学ぶことができないという、既往の技術とはまったく異なる特徴を持つ。工学者がその違いを十分に認識していないように感じる。

→原子力に限らず、これからは失敗経験なしにリスクを低減させる技術開発が必要となる技術が増えてくるだろう。しかし、それに対する知見はまだ少ない。

→この点についてどこまで議論を深めることができるか分からないが、その前段階として、「安全神話」がどのように作られてきたのかをフォーラムで話し合いたいと考えている。

（「安全神話」に関しては、後ほど指摘がなされた。）

タイトルが仰々しく感じる。例えば、『「原子カムラ」にある課題』→「市民と専門家の問題の捉え方はなぜこんなに違うのか」、「安全神話を考える」→「原子力って安全なの？」はどうか。）

- ・ Q17「原子力に携わっている人・組織の印象」は、首都圏住民と原子力学会員で大きなギャップが現れており、興味深い。特に「感謝している」「苦勞していると思う」「組織に問題がある」などは、フォーラムのアイスブレイクの話題として、ふさわしいのではないか。
- ・ 首都圏住民の「感謝している」「苦勞していると思う」の対象は、原子力学会員ではなく、現場で作業している方たちではないか。
- ・ 原子力学会員は、現場で働いている方は単なる作業員であり、「原子力に携わっている人」ではないと認識しているかもしれない。しかし、社会から見れば現場で働いている方も原子力従事者である。彼らのことについてフォーラムで話し合ってはどうか。それによって、エネルギー政策そのものについても、意見が出やすくなるのではないか。
- ・ 原子力は先端技術ではあるが、例えばメンテナンス作業は現場の方の手作業に依存している部分もある。原子力学会員は、原子力がそういう技術であるという認識が足りないのではないか。

続いて、木村氏より、資料 2-1、2-5 に基づき、フォーラムに関する具体的成果の報告がなされた。

首都圏住民のフォーラム参加申し込みが規定人数に達しておらず（8 名）、かつ、原子力に対する考え方のバランスを考慮し、8 名全員ではなく 6 名を選択し、残り 4 名は追加で募集する予定であることが説明された。原子力学会員に関しては、申し込みが 25 名で、10 名の参加者が確定したことが説明された。

フォーラムの設計およびフォーラム参加者の決定過程について、議論が展開された。

- ・ 「原子カムラ」の問題点は、市民と専門家のギャップではないか。
→我々（研究実施者）も、ギャップが大きな問題と捉えている。そのため、第 1 回フォーラムでは、お互いの「社会的リアリティ」の共有にかなりの時間を割いている。
- ・ 社会調査の結果を話し合いにリンクさせてはどうか（参加者に社会調査結果を示す）。お互いのギャップも把握しやすくなるだろう。
- ・ テーマが広すぎると、議論が発散してしまうおそれがある。もう少しテーマを絞ってもいいのではないか。（会社経営においては、議論の領域を絞って、問題点を見つける→その問題の原因を考える→解決方法を考える、という手法を取ることが多い）
→議論が発散してしまうのは確かに問題だと考えている。一方で、主催者側がテーマを限定してしまうのもよくないと考えている。
第 2 回～第 4 回のテーマは、あくまでも予定。次回何を話し合いたいかを、各回の最後に参加者に聞く予定（このことは、第 1 回のオリエンテーションの冒頭で参加者にきちんと説明する）。フォーラムは 2 週間おきに開催するが、その 2 週間間に、

参加者の意見を受けて次回のプログラムを検討する会議を開く予定である。

- 例えば、第1回は『原子カムラ』とはなんだろうか？ その課題はなんだろうか？
として、課題を出してもらおう。第2回以降、その課題を順番に扱っていく、という段取りはどうか。
- 「省エネ」はテーマとして広すぎるのではないか。
→市民とムラびとに対等に話し合ってもらいたいので、技術寄りのテーマばかりに
たくないという考えがある。また、「省エネ」の話題の延長として、「将来のエネル
ギー」についても話し合ってもらいたいと考えている。
- タイトルが仰々しく感じる。例えば、『原子カムラ』にある課題 → 「市民と専門家の
問題の捉え方はなぜこんなに違うのか」、「安全神話を考える」 → 「原子力って安全な
の？」はどうか。
- 首都圏住民の8名の申し込みをすべて採用しなかった理由は、社会も知りたがる点だと思
う。
→「原子力の利用一廃止」という質問に対して「どちらかといえばやめるべき」「やめ
るべき」という回答の人しか申し込んでこなかった。社会調査の意見分布と比べ、
明らかに偏っているので、「利用していくべき」や「どちらともいえない」の層の人
を追加で募集し、バランスを取りたいと考えている。
→その旨をきちんと最初に説明したほうが、公正感が増すだろう。
→賛成派は積極的には参加してこない（発言もしない）のであれば、フォーラムの
場でファシリテータが、「賛成派の意見を積極的に拾いたいと思う」と宣言しても
いいかもしれない。
- ぜひ、オブザーバーとして、フォーラムの様子を見てみたい。
→発言権はないが、その場にいることは可能。ぜひご覧いただきたい。

2. 次年度の計画について（配布資料 2-1）

木村氏より、資料 2-1 に基づき、次年度の計画が説明された。

また、木村氏が東大から PONPO に移り、体制が変わることが説明された。

3. その他

木村氏より、4名の外部評価委員に対し、次年度も継続して外部評価委員として協力してほしいとの申し出があり、4名の外部評価委員から同意が得られた。

また、次年度は2回外部評価委員会を開催する予定である旨が説明された（フォーラム・シンポジウムが終了した9月ごろと年度末）。

以上